

語りの談話における引用ストラテジー —引用標識「みたいな」と「って」を中心に—

澤 恩嬉

本研究は、ストーリーを語る談話において、語り手のコミュニケーション・ストラテジーの一つとしての「引用」がどのように使用されているかについて、直接引用句に導かれる「みたいな」と「って」を中心に考察したものである。同一人物の語り手が、親しい友人、初対面の年長者、初対面の日本語非母語話者にそれぞれアニメーションストーリーを語る場面で「みたいな」と「って」が出現する引用文の特徴を観察した。

その結果、親しい友人との談話において引用部分のあと「みたいな」が頻繁に使用されていた。その理由として、語り手は相手や語りの目的によって語りのスタイルを変えており、親しい友人には引用部分において感動詞やオノマトペなどを含む創造的な発話をより多く用いる話法をとっていたため、その文末表現として「みたいな」が選好されていることが分かった。このような「みたいな」を含む引用文は、語りの場に臨場感を与え、聞き手を語りの場に引き込みやすい効果をもたらしているのである。

1 はじめに

物語を語る場面は、語り手と聞き手のやりとりの場に、時空間的に離れている（聞き手の知らない）物語の場を取り入れる行為である。そのため、語り手は様々なコミュニケーション・ストラテジーを駆使しながら、現在の場に物語の場の再現を試みる。中でも効果的な再現の方法が「引用」であり、語りの談話においては頻繁に用いられるストラテジーの一つであると言える。

大津（2005）が「話し手はナラティブにおいて、ただでたために直接話法で登場人物に語らせているわけではなく、臨場感あるドラマを作るために、さまざまなストラテジーを用いていると考えられる。」と述べているように、物語を語るという行為は、単なる再現を超え、語り手による創造的な活動であると言える。そのくらい物語を語るという行為においては、多からず少なからず語り手自身の意図とする語り方（スタイル）が取り入れられており、語りに何らかの効果をもたらしているのである。

本稿では、アニメーションストーリーを語る談話で話し言葉の引用句に多く用いら

れる「みたいな」と「って」に注目し、これらの使用が語り方（スタイル）とどう関わるのか、具体的な談話例をもとに観察する。特に、同一話者である語り手が、親しい友人、初対面の年長者、初対面の日本語非母語話者という対人関係の異なる聞き手にそれぞれストーリーを語る場面で「みたいな」と「って」が出現する引用文の特徴を明らかにする。

2 先行研究について

2.1 引用と話法

引用研究は、歴史的に長く、数多くの研究がなされているが、「引用」の定義については、研究者によってまちまちである。星野（2008）は「基礎的研究においては、引用と非引用を分ける指標や指標に導かれる表現の特徴、引用表現に先行する事実と引用表現の関係、「引用」と「話法」の問題など、引用という行為をめぐって様々な議論がなされている」と指摘している。

書き言葉を対象とした引用研究の中では、砂川（1988）は「引用句の機能は、その句が発言される場を引用文全体が発言される場において再現することである」という引用における「場の二重性」を提唱している。さらに砂川（1989）は、引用に用いられる助詞が「～と」に限られるとし、次のように述べている。

「引用」という機能にかかわりをもつものとしては引用句の「～と」を受ける形式だけに限ることにする。その理由は、この形式だけが、話し手の場に元の発言や思考の場を「再現させる」機能を果たしうるものであり、この機能こそ「引用」というにふさわしいものであると思われるからである。（砂川 1989 p361）

一方、話し言葉を対象とした引用研究の場合では、近年「って」と「みたいな」を分析の対象とする研究が増えている。鎌田（2000）は、砂川の言う「～と」以外でも引用句を受ける形式があることを指摘したうえで、引用と話法について次のように定義づけている。

「引用」とはある発話・思考の場で成立した（あるいは、成立するであろう）発話・思考を新たな発話・思考の場に「取り込む」行為である。そして、「話法」とはその行為を表現する言語的方法のことである。日本語の場合、引用は助詞「と」を伴って行われることもあれば、そうでないこともある。その判断はどのような話法形式が選択されるかによって決定される。（鎌田 2000 p17）

要するに、砂川が様々な話法の中で二重の場を再現させる機能を果たしうるものとして「と」による表現のみを「引用」としたのに対し、鎌田は「引用」はある場で成立した思考や発言を新たな場に「取り込む」行為であるとし、「と」を伴う表現も伴わない表現も「引用」に含めている。

本研究では、ストーリーを語る談話において引用句に導かれる「みたいな」と

「って」に注目するが、鎌田の定義に倣い、これらを引用表現に用いられる話法の一つとして扱うこととする。

2.2 「語り」における引用

「語り」の場面での引用研究については、山口（2009）が、対話の場面での引用と語りの場面での引用について、[表1]のようにその違いを分かりやすく示している。[表1]のとおり、対話と語りは、元発話との距離（近接的か否か）、元発話者、および話法が果たす機能の3点において相違しており、語りには常に第三者が関与しているので、遠隔化された第三者の発言を引用する必要がある。

[表1] 対話の引用と語りの引用の違い（山口 2009 p85）

	対 話	語 り
元発話との距離	近接的・遠隔的	遠隔的のみ
元発話者	話し手・聞き手・第三者	第三者（過去の「私」を含む）
話法が果たす機能	伝達障害への対応	報告・再現

さらに山口は、「第三者が発した遠隔化されたことばを臨場感豊かに再現できると、その分だけ聞き手を語りに引き込むことができる。語られる出来事を聞き手に擬似体験させて出来事に対する評価を聞き手と共有する、という語りの目的に沿った発話提示が直接話法によって可能になる。したがって、語りのコンテキストにおいて直接話法がよく用いられるのには、それなりの根拠がある。」(p86)と述べている。

本稿では、アニメーションストーリーを語る談話をデータとして用いるが、ここでの元発話者である第三者は、アニメーションストーリーの中の登場人物の発話や思考である。ただし、登場人物は音声によるコミュニケーションを行っているが、言語によるものではないことを申し添えておく。データについての詳細は、3章で述べることとする。

2.3 引用表現としての「みたいな」

本稿では引用句に後続する「みたいな」と「って」に注目するが、引用助詞の「と」やその話し言葉である「って」はもちろんのこと、「みたいな」についてもすでに多くの研究がなされている。

山本（2013）は、「従来の引用研究では、「と」「って」という引用助詞を伴う形式のみを分析の対象としており、話し言葉に頻繁に見られる「みたいな」や「とか」で終わる発話形式は、「引用句（節）+引用助詞+引用動詞」という構文に比べ、不完全であり、非典型的な文だから引用研究として扱われないと指摘したうえで、語り手が具体的状況を演技的な発話によって示すとき、『みたいな』を用いて「距離のある発

話」として示すことが語りの内容についての権限を緩め、受け手にとってアクセスを可能にすることになる」と述べている。さらに「語り手が『みたいな』を使って演技的な発話を行うことは、語り手が物語の一部を可視化し、取り扱い可能にすることに加え、本来、語り手が持つ語る権利に対する距離化が明示される。これは語り手が物語を語るという行為における権限の関係を積極的に引き下げ、受け手と対等にする手段となる」と指摘している。

メイナード(2004)では、「みたいな」を類似引用と呼び、従来の引用表現が「と」を基調とするのと違い、類似引用は「みたいな」の持つ比況、例示、推量、躊躇などの意味を利用した発話行為を調整する技法として機能するとし、また、会話を導入すること自体が声の多重性をより鮮明に表現することを可能にするのだが、「みたいな」によって導入することは、話し手のコメントの仕方をより豊かに表現することになると指摘している。

佐竹(1995)では、文末に使用される「みたいな」を若者ことばの特徴である客観化表現の一つとして紹介し、自分自身の気持ちを直接的に表現するのではなく、第三者の立場から客観的に述べたり、自分自身の問題を自分自身のこととして直接言及するのを避けたりすることがあるとしている。前田(2004)も、文末表現としての「みたいな」の機能について、当の若者たちはどうとらえているのかアンケート調査を行っている。その結果、「みたいな」は若者語の機能のうち、「緩衝機能」が最も強く、自信・確信がない時の消極的な使用から、ほかす言い方・曖昧な言い方が相手への配慮になるという積極的な使用もあると述べている。しかし、メイナード(2004)が指摘するように「みたいな」を若者ことばに限定するには、近年その使用範囲がかなり広がってきており、若者以外の世代にも定着してきている。本研究では「みたいな」を使用するのが若者であっても、伝える相手によってどのような使われ方をしているのかに注目し考察したい。

以上の先行研究からも、話し言葉に頻繁に用いられる「みたいな」が引用表現として話し手の表現を豊かにし、聞き手を積極的に関わらせる効果があることを読み取ることができる。しかしこれらの研究は、対話での「みたいな」の使用に注目したものがほとんどであり、語りの場面での引用表現として「みたいな」の使用について論じた研究はあまり見られず、その使用例を具体的に示したものも少ない。語りの場面は、語り手と聞き手の役割が明確であり、しかも引用の持つ「場の二重性」や「場の再現」という意味で、「みたいな」に導かれる引用句の観察に適していると考えられる。さらに本研究では、話し言葉の引用助詞である「って」の使用を同時に観察することで、より「みたいな」の引用表現としての使われ方が明らかになるのではないかと考える。

2.4 対人関係と談話標識

本研究では、同一話者である語り手が、親しい友人、初対面の年長者、初対面の日本語非母語話者という対人関係の異なる聞き手にそれぞれストーリーを語る場面で「みたいな」と「って」が出現する頻度と引用文の特徴を明らかにする。

談話の参加者同士の世代差や親疎関係など人間関係に注目した先行研究としては渡邊・川口(2020)があるが、渡邊らは20代の友人同士と50代の夫婦の自由会話の談話

資料を用いてその中で用いられる「談話標識」を分析することによって、「親しい人間関係」における「親しさの度合い」と「年代の違い」が談話展開にどのような影響を与えているかを探っている。談話標識の機能としては、琴(2005)は「談話標識とは、談話の中で話者が情報内容以外にその内容を効果的に伝えるために相手に送る信号(マーカー)である」とし、西野(1993)は、「その会話の内容理解を助ける」「参加者間のやりとりをよりスムーズにする」「会話者間の人間関係を円滑にする」と述べている。

引用研究においては、対人関係の違いによるその機能や使用効果に触れている研究があまり見当たらないことから、本研究で注目する「みたいな」と「って」を引用句に導かれる引用標識として異なる人間関係においてのその使用例を観察していくことは大変意義があると考えられる。

3 データについて

データとしては、長さ6分程度のアニメーションを見て、そのストーリーを語るという場面を設定し、そこで得られた談話データを使用した。アニメーションを見た女子大学生1名が語り手となり、同年代の親しい友人と初対面の年長者、同年代日本語非母語話者にそれぞれストーリーを語ってもらった。語り終わったあとは、聞き手の3名にもその内容について語り手である女子学生に説明してもらうよう、事前に語り手に伝えている。

データ収集にあたっては、渡辺(2003)の実験方法に倣って実施している。使用したアニメーションビデオは、ピングー・シリーズの「ピングーのパン作り」という話である。この話のあらすじは以下のとおりである。

散歩の途中ピングーはパン屋のケーキを見てパンを作りたくなる。パン屋のおじさんに作り方を教えてもらい帰宅したピングーは、妹のピンガとパンを作ってみるが、小麦粉やイースト菌などの量がいいかげんだったためオーブンが爆発しそうになる。パパとママが帰ってくると、キノコのようなパンができていた。

このピングー・シリーズを選択した理由について渡辺(2003)は以下の5つを挙げている。

- ① 所要時間が5分と適当な長さである。
- ② 登場人物同士が音声でコミュニケーションを行っているが、言語ではない(注¹⁾)。
- ③ 登場人物に対する前提知識がなくてもストーリーを理解できる。
- ④ 粘土のアニメーションなので画面の情報量が少ない(単純化された世界)。
- ⑤ ペンギンの世界の話なので、インフォーマントの文化的背景に左右されない。

さらに、渡辺は「誰が見ても、ストーリーを理解する上で条件が同じであり、かつ分かりやすい、ということがこのアニメーションを選択した理由である」と述べている。

本研究で使用するデータの被験者の組み合わせは以下のとおりである。

- 【データ1】語り手A(20代女子大学生) 聞き手B(20代女子大学生): 親しい友人同士
【データ2】語り手A(20代女子大学生) 聞き手C(70代女性): 初対面
【データ3】語り手A(20代女子大学生) 聞き手D(日本語非母語話者20代女性): 初対面

データ収集にあたっては、次のような手順¹を踏んでいる。

- ① 語り手Aに6分程度のアニメーションビデオを2回見してもらう。
- ② 語り手Aは自分が見たアニメーションがどんなストーリーだったか、聞き手B(親しい友人)に説明する。Aの説明が終わったあと、聞き手Bが聞いた話を語り手Aに説明する。
- ③ 語り手Aが初対面の聞き手C(70代女性)に同じように説明する。Aの説明が終わったあと、聞き手Cが聞いた話を語り手Aに説明する。
- ④ 語り手Aが初対面の聞き手D(20代女性日本語非母語話者)に説明する。Aの説明が終わったあと、聞き手Dが聞いた話を語り手Aに説明する。

以上の手順によって得られた音声データおよび動画データ(注ⁱⁱ)は、渡辺(2003)の談話表記の凡例(注ⁱⁱⁱ)に基づいて文字化を行った。本稿では、文字化したデータから語り手Aが聞き手B、C、Dにストーリーを語る場面のみを分析の対象とする。

4 結果と分析

まず、文字化したデータから「みたいな」と「って」が使われた発話を抽出し、次にその中から引用句と見られる発話²だけを抽出する作業を行った。さらに、引用部分に続く「みたいな」と「って」のバリエーションとして、文末で使用される「みたいな」と「みたいな感じ/こと」のような「みたいなN」の形、「みたいな、なって」³と「みたいになって」⁴の形に分類した。「って」のバリエーションとしては、文末で使用される「って」と「って感じ/こと」の形、「ってなって」の形、「っていう」の形、「って思う」の形、「いう」と「思う」以外の動詞が続く形に分け、それぞれの出現数をカウントした。

[表2]と[表3]は、【データ1】【データ2】【データ3】での「みたいな」と「って」のそれぞれの出現数を表したものである。

¹ 手順①～③については同じ日に行うことができたが、被験者の都合により手順④については翌日の採集となった。

² 明確に比況・例示の「NみたいなN」(例:「ブロッコリーみたいな形のパン」など)の例を除き、引用の判定が曖昧な場合にはすべて分析の対象とした。

³ 「みたいな」のあとポーズや笑いがあり、「なって」と続く例であり、文末の「みたいな」としてカウントすることも可能だが、本稿では区別してカウントしている。

⁴ 「みたいな」の形ではないが、直接引用句に後続するものとしてカウントした。

[表2] 「みたいな」の出現数

	みたいな	みたいな感じ/ こと/N	みたいな、なって	みたいにな って	合計
データ1	21	4 (感じ3/こと1)	3	2	30
データ2	-	3 (感じ2/顔 ⁵ 1)	1	-	4
データ3	4	1	1 (ふうになって)	1	7

[表2]を見ると【データ1】の親しい友人との場面において「みたいな」で終わる文末使用が圧倒的に多く、【データ2】初対面の年長者との場面や【データ3】の初対面の同世代非母語話者との場面では、ほとんど使用されないのが分かる。

[表3] 「って」の出現数

	って	って感じ/ こと	ってなって	っていう	って思う	って+V	合計
データ1	1	-	3	-	1	-	5
データ2	1	1(こと)	2	3	1	1	9
データ3	2	1(感じ)	5	-	3	2	13

次に、[表3]の「って」の出現数を見ると【データ3】で最も多く使用され、【データ2】でも「みたいな」に比べ多く使われていたのが分かる。【データ1】では「みたいな」に比べ「って」はほとんど使用されていない。また、「って」の文末使用がすべてのデータにおいて全体的に非常に少ないことにも注目しておきたい。

以下、その詳細について具体的な談話例で見ていくこととする。

4.1 創造的な発話に後続する「みたいな」

語りの談話の引用部分に用いられる会話体の発話は、語り手がアニメーションの登場人物の発話や思考を直接引用の形で真似したり、再現したりしているものである。例1)は親しい友人への語りの場面だが、パンの作り方を教えてもらったピングーが、自分もパンが作れると自信を持った様子を再現している。

例1) [データ1] 親しい友人同士

- 35 A なんかピングーが、なんかおじさんに、おじさんと一緒にパン作りを覚えてもらったのね。
 36 B うんうん うんうん
 →37 A 材料とかいろいろ見て、〈材料を入れるジェスチャー〉なんか もうおれ作れそうみたいな@@@
 38 B うん @@@やる気?やばい@@@
 39 A めっちゃなんかちっちゃかったんだけど、〈両手を広げるジェスチャー〉どーんってなんかおっ
 きくなって@@@
 40 B うん @@@パンが?@
 41 A そう、違う違う自分が、

⁵ 「ええ〜?みたいな顔してて」のように、「感動詞+みたいなN」の形である。

37で語り手Aは、「なんか」のあと声色を変えて「もうおれ作れそう」と言ってジェスチャーを交えて演じている。この発話のあと、「みたいな」とともに大声で笑っている。これに対し、聞き手Bも一緒に笑いながら「やる気? やばい」と言っていて、ここで会話がかなり盛り上がっていることが分かる。

例2) も同じくピンゲーがパンが作れそうと自信を持った場面を年長者である聞き手Bに説明している談話例である。

例2) [データ2] 初対面の年長者

- 47 A その過程をピンゲーが教えてもらってたんですね。
 48 C はい。
 →49 A それでもう自分が教えてもらったのですごくもうできるみたいな@@@なって、ピンゲーがおっきくこう(胸を張るジェスチャー) <@@@胸を張ったように@@@>
 50 C <@うんうん@>
 →51 A こうピンゲーがいて、そして、自分がすごくできるってなったので、外に出て自分のおうちに戻ったんですね。

例2) の49で語り手Aは「できる」の部分で声色を変えて言ったあと、「みたいな」と笑いを交えながら説明をしている。笑いのあと「なって」と説明が続くが、今度はジェスチャーを交えて自信を持ったピンゲーの姿を再現している。これに対し、聞き手Cも笑いながら「うんうん」とあいづちを打っていることが分かる。また、語り手Aは51でも「自分がすごくできる」と引用の形で説明しているが、ここでは49の発話に比べかなりトーンダウンした語り方をしており、「ってなった」の形で淡々と説明を続けている。

例3) も同じ場面を日本語非母語話者である聞き手Dに説明している場面だが、ここでも「みたいな」が使用されている。

例3) [データ3] 初対面の同年代非母語話者

- 42 A そういうパン作りをしてたんですね、そしたら、それを見たピンゲーが自分もできるって思って
 43 D はい
 →44 A ちっちゃかったピンゲーがおっきくこう@@(胸を張るジェスチャー) @@できるぞ~みたいな@@@
 45 D @@@@

例3) の44でも語り手Aがジェスチャーを交えてピンゲーの様子を真似しながら「できるぞ~」と声色を変えて再現している。そのあと「みたいな」と一緒に大声で笑っており、それを見た聞き手Dも一緒に大声で笑っている。実はこの発話の前の42でも語り手Aは「自分もできる」と声色を変えて直接引用しているが、そのあと「って思って」を使って説明を続けている。ここでは、「自分もできる」という直接引用の前に「ピンゲーが」と引用の主体を明示していたことで、このあとも引用助詞と引用動詞を持つ典型的な引用の形式を辿っていたのだと考える。つまり、「みたいな」が用いられる場合は、引用発話の主体が省略されることが多く、「みたいな」の文法的な性質から引用動詞が後続されることもない。

前項の[表1]の結果にもあるように、直接引用に後続する「みたいな」は、親しい友人への語りに最も多く現れているが、引用に入る前に「なんか」のようないい淀

みや感動詞⁶が使われたり、ジェスチャーや笑いを伴ったり、声色を変えて語り手自身の声とは違う声で登場人物を演じるといった「創造的な発話⁷」を引用部分に用いる特徴が観察された。「みたいな」はこのような「創造的な発話」に導かれることが多く、語り手によるこのようなストラテジーは聞き手の関心を引き、語りの場を盛り上げる効果をもたらせていることが確認できた。

4.2 オノマトペに後続する「みたいな」と「って」

次に、「みたいな」に引かれる引用句の特徴として、オノマトペが多く用いられることが観察された。オノマトペを引用句として認定するかどうかについては、オノマトペが引用助詞「と」を伴う性質から引用句にも用いやすいとされている。田守(1998)は擬音オノマトペおよび「と」を必要とするオノマトペの方が擬態オノマトペおよび「と」を必要としないオノマトペよりも引用され易いと指摘している。

例4)は擬音オノマトペのあとに「みたいな」が用いられた例である。

例4) [データ1] 親しい友人同士

- 102 A 間違えているから、[なんか、かまどっていかオープンみtainな中でパンが暴れだして、
 103 B [うん あああ～ ええ？
 →104 A ぼぼぼぼぼ みtainな [@ええ～なに みtainな @, ピンゲーも, [小っちゃいピンゲーも
 105 B [やばい@@ [ああ, 小っちゃい
 106 A ちょっとびっくりして, なんかちょっと隠れたのね, びっくりしすぎて,
 うん うん

例4)の104では「ぼぼぼぼぼ」というオノマトペを使ってそのあと「みtainな」を後続させており、それに対し、聞き手も105で笑いとともに「やばい」と感想を述べている。オープンが揺れる様子を「ぼぼぼぼぼ」という創造的なオノマトペを「みtainな」と一緒に用いたことで、より臨場感溢れる表現になっており、場が盛り上がっていることが分かる。

例5)と例6)は、例4)の[データ1]と同様の場面が[データ2]と[データ3]でどのように表現されたかが分かる例である。

例5) [データ2] 初対面の年長者

- 84 A 凄く材料が多かったんですよ, オープンの中に入っていたパンが暴れ出しちゃって@@もうすぐ ガタガタ@@@
 85 C @@@
 →86 A ガタガタになってしまっ@@@
 87 C うん
 88 A でそれにびっくりしたピンゲーとピンゲーの妹ちゃんは自分の部屋の隅っこに隠れてしまっ

⁶ 「えっ、入ろうみtainな」「ああ～、ああ～、みtainな」などの感動詞を含む例がある。

⁷ 鎌田(2000)は直接引用句には、元発話の再現を目指したものと、元発話から形態的にも内容的にもかけ離れた新たな表現を目指したものとを区別し、「引用句創造説」を提案している。大津(2005)では、ナラティブの中で話し手が登場人物のことばとしてフレームづけて提示する発話を「創作ダイアログ」と呼んでいる。

例6) [データ3] 初対面の同年代非母語話者

- 80 A パンがオープンの中でガタガタ揺れ始めたんですよ、
 81 D ええ～
 82 A で、多分もう怖くなっちゃってピングーとピングーの妹は近くにあったところに隠れて
 83 D はい はい

例5) の84と86、例6) の80でオープンが揺れる様子を「ガタガタ」というオノマトベを使って表現しているが、いずれも引用助詞などを伴わず、説明していることが分かる。鎌田(2000)は、「と」が義務的に必要とされるのは、オノマトベ性が高く、語彙性が低いオノマトベであると指摘しているが、「ガタガタ」のようにオノマトベとしてある程度使用が定着されるとオノマトベ性が低く、語彙性が高くなり、引用助詞を必要としないケースもあるのではないかと考える。

例7) 例8) は、オノマトベの後に「って」が用いられた例である。

例7) [データ2] 初対面の年長者

- 66 A 入れているときも、こう、混ぜているときも、なんかその入れているときにこう粉がちょっと
 出なかったときがあって、本当は入ってたんですけど出なくて壁に〈投げるジェスチャー〉ぼーん
って@@@投げちゃって
 67 C @@@@
 68 A 絵飾ってたんですけど、そこにもうドロドロになっちゃったり、

例8) [データ3] 初対面の同年代非母語話者

- 91 A オープンの中からでてきてその形が〈下から上に丸を作るジェスチャー〉もこって@@、普通のパ
 ンってこういう〈手で小さい丸を作るジェスチャー〉丸い感じじゃないですか。
 92 D ふ～ん ああ
 →93 A じゃなくて、型に入ってたやつが〈下から上に丸を作るジェスチャー〉もこって@@、おっきいな
 なんか、膨らんでるんですけど、
 94 D はい @@@

例7) 例8) は、パン作りをしているピングーの様子を語っている場面である。例7) の66でピングーがパンの粉が入った箱を「ぼーんって」壁に投げたと説明している、例8) の91と93では、膨らんだパンの様子をジェスチャーとともに「もこって」と説明している。いずれもジェスチャーと笑いを交えており、聞き手も笑いながら説明を聞いていてかなり盛り上がっているように見える。しかしなぜここでは、「みたいな」が使われず「って」が用いられたかについて、一つには例7) の「ぼーんって」のあとには「投げちゃって」が、例8) 発話93の「もこって」のあとには「膨らんでるんですけど」と動詞で表現される内容を副詞的に修飾しているという文法的な理由が挙げられる。また、例7) と例8) が初対面場面であること、「ぼーん」や「もこ」というオノマトベが語彙性が高く、「創造的な発話」としては考えにくいことから「みたいな」が選ばれなかったと考えられる。

4.3 「みたいな」の音声表現上の特徴

これまでの談話例から「みたいな」が用いられる引用句には、会話体のほか、感動詞やオノマトベが多く用いられていることが分かった。会話体でも声色を変えて、ジェスチャーを交えるなどして、より創造的な会話体を作りあげている時ほど「みた

いな」が後続しやすいことが観察されている。引用句の特徴のほかに、「みたいな」そのものの音声的な特徴にも触れておきたい。

談話例9)は、語りが盛り上がってきて「直接引用句+みたいな」の形が矢継ぎ早に使われた例である。

例9) [データ1] 親しい友人同士

- 79 A おじさんは入れてなかったんだけど、ピングーはもうなんかもうざざ~みたいな@@@
 80 B うんうん
- 81 A 感じて入れててええ~?みたいな@@@,で、入れてるときもドロドロ周りはドロドロで
 82 B @@@うん ああうん
- 83 A なんかつちっちゃんピングーがああ~ああ~ああ~みたいな@@@なってて@
 84 B @@@
- 85 A でもなんかピングーはちょっとやる気!みたいな感じて@@@
 86 B まだ?@@@
- 87 A もう頑張ってまあ良いかあみたいなちょっと、自分もちょっと味見してみて、
 88 B うんうんうん うんうん
- 89 A ちょっとちっちゃんピングーにもどうぞみたいな感じてやってて、まあいいやって
 90 B うん,あげて@@@
- 91 A 感じて焼いたんだけど ちっちゃんピングーが周り汚れてるよ~っみたいなこと言ってる
 92 B うん ああ~
- 93 A ああ~やばいみたいな@@@なんか壁にかけてあった絵とかにも材料ばば~みた<XX>@@@
 94 B @@@ うん [ああ、ばあーって@@@]

語り手が用いる引用句がより創造的な発話であればあるほど、「みたいな」が非常に早口で発話されることが多く、そのあと大きな「笑い」を伴うため、93の「材料ばば~みた <XX> @@@」のように、一部聞き取れなかったり、非常に小さい声で「みたいな」を後続させたりなど、省略とも言えるほど引用部分だけが語られる例も観察された。

5 まとめと今後の課題

本稿では、物語を語る談話において、語り手のコミュニケーション・ストラテジーの一つとしての「引用」がどのように使用されているかについて、「みたいな」と「って」を中心に考察した。その結果、語り手が会話体などを用いる直接引用句の語られ方によって、選ばれる引用標識が異なっていることが分かった。特に親しい友人に「みたいな」が頻繁に使われていたことは、直接引用句において語り手が声色を変え、創造的な発話を用いて演じる時やオノマトペとともに臨場感豊かに状況を演出する時ほど、「みたいな」が持つ比況・例示といった本来の文法的な性質から「例えばそのような感じ」という意味で選ばれやすいのではないかと考える。

池谷 (2018) は、「引用の言葉というのは、オリジナルの言語をそのままコピー&ペーストするのではなく、話者が意図を持って選び出し、話し手によって主体的に作り出された「表現」であるということである。」と述べている。

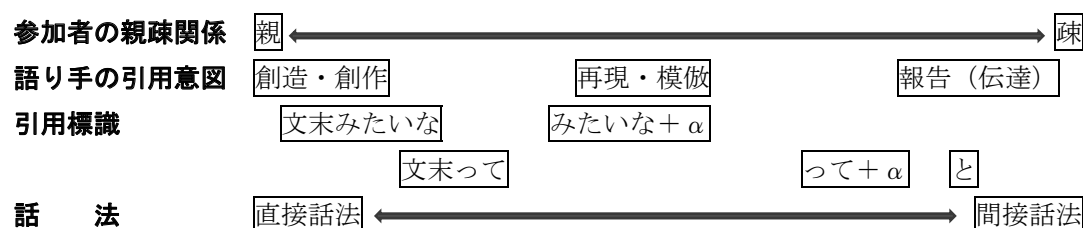
本研究で観察した引用句に導かれる「みたいな」についても同様のことが言え、語り手が場を盛り上げるといった目的のもと、より創造的な表現を用いてストーリーを伝えたいという意図から「みたいな」を選んでいくことが分かった。そして親しい友人への語りの場においてその意識がより強く働いたのではないかと考える。つまり、「み

たいな」を使用することで、山口（2009）が指摘する語りの場での話法が果たす機能が単なる「報告」や「再現」、「模倣」を超え、聞き手によりその物語を楽しんでもらうために、語り手によって新たな物語が「創造」されているとも言える。

一方で、初対面の年長者および初対面非母語話者には、直接引用の形そのものがそれほど多くはなく、全体的に引用助詞の「って」の方が選ばれやすいことが分かった。これには、やはり内容をより正確に伝えたいという語り手の意図が働き、直接引用を用いた際にも「再現」に留まったことで「って」の使用が多く用いられたのではないかと考える。しかし、このような初対面の場においても、語りの中で語り手が力を入れて表現したいという場面においては、創造的な発話を用いるケースも見られ、その場合には「みたいな」を後続させていることが観察された。

要するに、語り手は語りの場の盛り上げを意識しているか、より正確に情報を伝えることに意識を集中するかなど、どこに目的をおくかによって、創造したり、再現したり、単なる報告に留めたりと切り替えており、それぞれの引用句により選好される引用標識を無意識のうちに選択しているのである。そのイメージを図式化すると [図1] のとおりである。

[図1] 語り手の引用意図と選好される引用標識



本稿では、文末に用いられる引用表現の「みたいな」が話し言葉として若者に多用されるという従来の研究の立場から、語りの引用意図が引用句に影響を与え、引用標識が選ばれるという立場で考察を行った。今回用いたデータの語り手が20代の女子学生であることから、若者に限らず創造的な発話において「みたいな」が選ばれやすいことを検証するためには、他の世代を語り手とした同様の調査が必要であると考えられる。また、女性同士だけでなく、男性同士や異性との場面ではどうなのかについても対象を広げ、検討を続けていく必要があるため、今後の課題としたい。

注ⁱ 言語が現れないアニメーションのストーリーを語る場面での引用について、鎌田（2000）は、「直接引用といえども、元の発話・思考とは何らかの関係を保ちつつも、『再現』という域を超えた新たな場における新たな発話・思考を『表現』していると考えなければ説明のつかない言語事実がある」とし、以下の二つの例を取り挙げている。

①テレビ座談会の司会者

「なださん、そういうふうには、お前のために、お前のために、って言われたら子供はいやで離れていくんじゃないですか？」

②筆者の自宅食卓でみかんを食べる筆者のそばでよだれを垂らしている愛犬ジェフリーを見て、
筆者の妻が 「修さん、ジェフリーが僕にもみかんちょうだいよっていうてるわよ。」
(鎌田 2000 p18)

①については、「『お前のために、お前のために』という表現は必ずしも親が子供に言うとは限らないことを知ったの上での選択で、むしろ「直接引用スタイル」とも言うべき創造的な表現である。」と述べており、②については、「元の発話・思考が言語表現ではないものを新たな発話の場に『取り込んで』、それを言語表現化した『直接話法表現』である。」と説明している。

注ⁱⁱ 全体の長さが【データ1】10分30秒、【データ2】11分20秒、【データ3】9分15秒であり、語り手Aが説明している部分だけの長さは【データ1】6分20秒、【データ2】6分35秒、【データ3】6分15秒とほぼ同じであった。

注ⁱⁱⁱ 【談話表記の凡例】

.	下降イントネーション
,	継続調イントネーション
?	上昇イントネーション
—	中断されたイントネーション
[]	同時に発話されている部分
...	ポーズ
<数字>	長い沈黙 数字が秒数を表す
(H)	吸気音
(TSK)	舌打ち音
(THROAT)	咳払いの音
(SNIFF)	鼻すすりの音
%	声門化した声
@	笑い声
<X X>	聞き取りにくい部分
<@ @>	笑い声で発話されている部分
<WH WH>	ささやき声で発話されている部分
<L-penguin L-penguin>	ペンギン語を真似て発話している部分

引用文献

池谷知子 (2018) 「引用形式『って』における終助詞的機能」『Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin : トークス』21, pp.41-69.

- 大津友美 (2005) 「親しい友人同士の雑談におけるナラティブ—創作ダイアログによるドラマ作りに注目して—」『社会言語科学』 8 - 1, pp.194 - 204. 社会言語科学学会
- 鎌田修 (2000) 『日本語の引用』 ひつじ書房
- 琴鐘愛 (2005) 「日本語方言における談話標識の出現傾向—東京方言, 大阪方言, 仙台方言の比較—」『日本語の研究』 1 (2), pp. 1 - 17. 日本語学会
- 佐竹秀雄 (1995) 「若者ことばとレトリック」『日本語学』 14 - 11, pp.53 - 60. 明治書院
- 砂川有里子 (1988) 「引用文における場の二重性」『日本語学』 7 - 9, pp.14 - 29. 明治書院
- 砂川有里子 (1989) 「引用と話法」『講座日本語と日本語教育』 4, pp.355 - 387. 明治書院
- 田守育啓 (1998) 「日本語オノマトペ—多用な音と様態の表現—」『日本音響学会誌』 54, 3, pp.215 - 222.
- 西野容子 (1993) 「会話分析について—ディスコースマーカーを中心として—」『日本語学』 12 (5), pp.89 - 96.
- 星野祐子 (2008) 「コミュニケーションストラテジーとしての引用表現—発話末の「みたいな」の表現効果—」『人間文化創成科学論叢』 11, pp.133 - 142.
- 前田直子 (2004) 「文末表現『みたいな。』の機能」『言語』 33 (10), pp.54 - 57.
- 泉子・K・メイナード (2004) 『談話言語学—日本語のディスコースを想像する構成・レトリック・ストラテジーの研究』 くろしお出版
- 山口治彦 (2009) 『明晰な引用, しなやかな引用—話法の日英対象研究—』 くろしお出版
- 山本真理 (2013) 「物語の受け手によるセリフ発話—物語の相互行為的展開」『社会言語科学』 16 - 1, pp.139 - 159. 社会言語科学学会
- 渡邊千晶・川口良 (2020) 「親しい人間関係における談話標識について—若年層友人同士と中高年夫婦の談話を比較して—」『言語文化研究科紀要』 文教大学大学院言語文化研究科編 (6), pp.71 - 91.
- 渡辺文生 (2003) 「日本語学習者と母語話者の語りの談話における指示表現使用についての研究」平成13~14年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告書